

中高年男性の不安の構造を探る¹

松浦民恵

(少子高齢化社会の総合政策研究班委嘱研究員)
(ニッセイ基礎研究所生活研究部門副主任研究員)

I. はじめに

1. 課題認識

人はなぜ不安になるのか。不安は主観的な意識であり、客観的にみれば安心な状況にあっても、不安を感じ続ける人はいるかもしれない。逆に、客観的にみてリスクが大きい状況であるにもかかわらず、不安を感じないケースもあり得る。また、大切なものがあるがゆえに不安が高まるかもしれないが、だからといって、不安を軽減するために大切なものを持つことを諦めることにはならないだろう。

不安については、えてして漠然とした、否定的なものとして捉えられる向きが大きいですが、不安を感じる理由をある程度明らかにすることができれば、不安の軽減策を講じる、あるいは、受け入れざるを得ない不安かどうかを見極めるといった前向きな意義が見出せる。

ニッセイ基礎研究所が実施した中高年パネル調査は昭和8年～22年生まれの男性を対象としている。この世代は今後高齢社会の主役となっていく世代であり、第1回～第4回の調査期間中に職業生活、家庭生活、健康状態に少なからず変化がみられる年代でもある。調査結果をみると、彼らの多くは何らかの不安を抱えており、不安の内容によっては調査年度が新しくなるにつれて不安意識が高まってきている。社会保障制度をはじめとする社会的な支援体制や、有益な自助努力のあり方を検討していく上で、中高年男性の不安意識を分析することは一つの重要なステップとなるだろう。

中高年男性の不安意識については既にいくつかの先行研究があるが、パネル・データによる分析事例はほとんど見当たらない。どういう人が何に不安を感じているのか、一時点の分析に

1 本稿は、2006年7月の関西大学公開講座での講演内容をまとめたものである。本稿の分析の詳細については、松浦民恵（2005）「中高年男性の不安の構造を探る—キーワードは健康不安—」『ニッセイ基礎研所報』VOL.39、pp84-pp118を参照されたい。

とどまらず、不安意識の変化やそれを規定する要因を分析することで、従来以上に不安意識の解明に近づけると考えられる。本稿の目的は、中高年男性の不安の構造を明らかにすることである。

2. 分析の流れ

(1) 不安意識（13項目）のトレンド分析～コーホート、年齢、時代

中高年パネル調査では、不安意識に関する質問として、次のような13項目を提示し、「非常に不安」、「やや不安」、「あまり不安ではない」、「不安はない」の4段階スケールで評価を得ている。

- ・自分の死亡によって家族に負担がかかること（自分の死亡）
- ・自分が病気や事故にあうこと（病気や事故）
- ・家族が病気や事故にあうこと（家族の病気や事故）
- ・自分の介護が必要になること（自分の介護）
- ・配偶者の介護が必要になること（配偶者の介護）
- ・親の介護が必要になること（親の介護）
- ・老後の生活が経済的に苦しくなること（老後の経済生活）
- ・自分または家族が失業すること（失業）
- ・住宅などのローン返済で、生活が苦しくなること（ローン）
- ・十分な資産が蓄えられないこと（資産蓄え）
- ・情報化や技術進歩についていけなくなること（情報化等）
- ・家族のまとまりがなくなったり、対立したりすること（家族）
- ・友人関係がうまくいなくなること（友人）

まず、これらの項目のそれぞれについて、コーホート別の特徴、年齢および時代（調査年度）による影響を確認する。

(2) 不安意識等の分類

① 不安意識の内容の構造化（不安指標の作成）

多様な不安意識を詳細に分析していく上で、13項目は数が多すぎる。また、各項目の中には似通った項目もあれば、関係性の薄い項目もある。そこで、主成分分析により13項目の不安意識の内容を構造化するとともに、分析を進める上で必要となる指標を作成する。

② 不安意識を持つ人のタイプ分け

1人が1つだけの不安意識を持っているわけではなく、実際には同じ人がさまざまな不

安を抱えている。人単位でみた時に、不安意識のタイプはどのように分かれるのかを確認しておくことは、不安意識の分析において重要なステップとなる。そこで、①で作成した指標をもとに、クラスタ分析により不安意識を持つ人のタイプ分けを行う。

(3) 不安意識の特徴分析

どういう人が、どのような不安意識を持っているのか、コーホート、年齢、時代以外の現状に焦点をあてて傾向を分析する。具体的には、調査4回分をプールしたパネル・データのクロス集計により、属性や健康状態、経済的な状況、家族や仕事の状況等によって不安タイプや不安指標に差異がみられるかどうかを検証する。

(4) 不安意識の変化に関する分析

パネル・データの特徴を生かし、不安意識の変化について分析する。不安の原因となる状況の変化が不安意識にどのような影響を与えるのかを、不安指標を使って分析するとともに、不安意識の特徴分析の結果を変化の面から確認する。

II. 不安意識（13項目）のトレンド分析

図表-1で、各項目に関して「不安」と回答している割合（「非常に不安」、「やや不安」の計）をみると、「自分が病気や事故にあうこと」、「家族が病気や事故にあうこと」、「自分の介護が必要になること」が特に高く、03年には約9割にのぼっている。一方、「親の介護が必要になること」（03年は37.3%）、「住宅などのローン返済で、生活が苦しくなること」（同27.8%）、「家族のまとまりがなくなったり、対立したりすること」（同43.0%）、「友人関係がうまくいかなくなること」（同30.1%）は比較的低い回答率にとどまっている。

調査年度別にみると、97年から03年にかけて、「病気や事故」、「自分の介護」、「配偶者の介護」、「老後の生活が経済的に苦しくなること」、「家族」はいずれも4.0ポイント程度、「情報化や技術進歩についていけなくなること」は9.0ポイント上昇している。逆に、「親の介護」は調査年度が新しくなるにつれて低下傾向にあり、03年は97年に比べて12.2ポイント低下している。

コーホート別の特徴をみると、昭和8～12年生まれば「死亡によって家族に負担がかかること」、「親の介護」、「自分または家族が失業すること」への不安が大きい。一方、昭和18～22年生まれば「情報化等」への不安が大きい。

ただ、こうした調査年度別のクロス集計では、その特徴が時代効果（調査年度による変化）によるものなのか、加齢効果によるものなのかを峻別できない。そこで、各項目の不安意識をポイント化（「非常に不安」を4点、「やや不安」を3点、「あまり不安ではない」を2点、「不安はない」を1点）し、調査年度単位で、各歳別の不安ポイントをプロットすることによって、

加齢、時代それぞれの影響をみていきたい（図表-2）。

たとえば、同じ年齢において、新しい調査年度の不安ポイントが高くなっていけば、時代効果によって不安意識が高まっていると捉えることができる。一方、いずれの調査年度でも不安ポイントが右上がりと同じような傾向でプロットされていけば、加齢によって不安意識が高まったと解釈することができる。

「親の介護」、「失業」、「ローン」については、年齢が高くなるほど不安意識が弱まる傾向がみられ、これらの不安ポイントの低下は、時代よりも加齢による影響が大きいと解釈できる。また、「病気や事故」、「家族の病気や事故」、「自分の介護」、「配偶者の介護」は、60歳代後半ぐらいから不安ポイントが若干上昇する傾向がうかがえる。

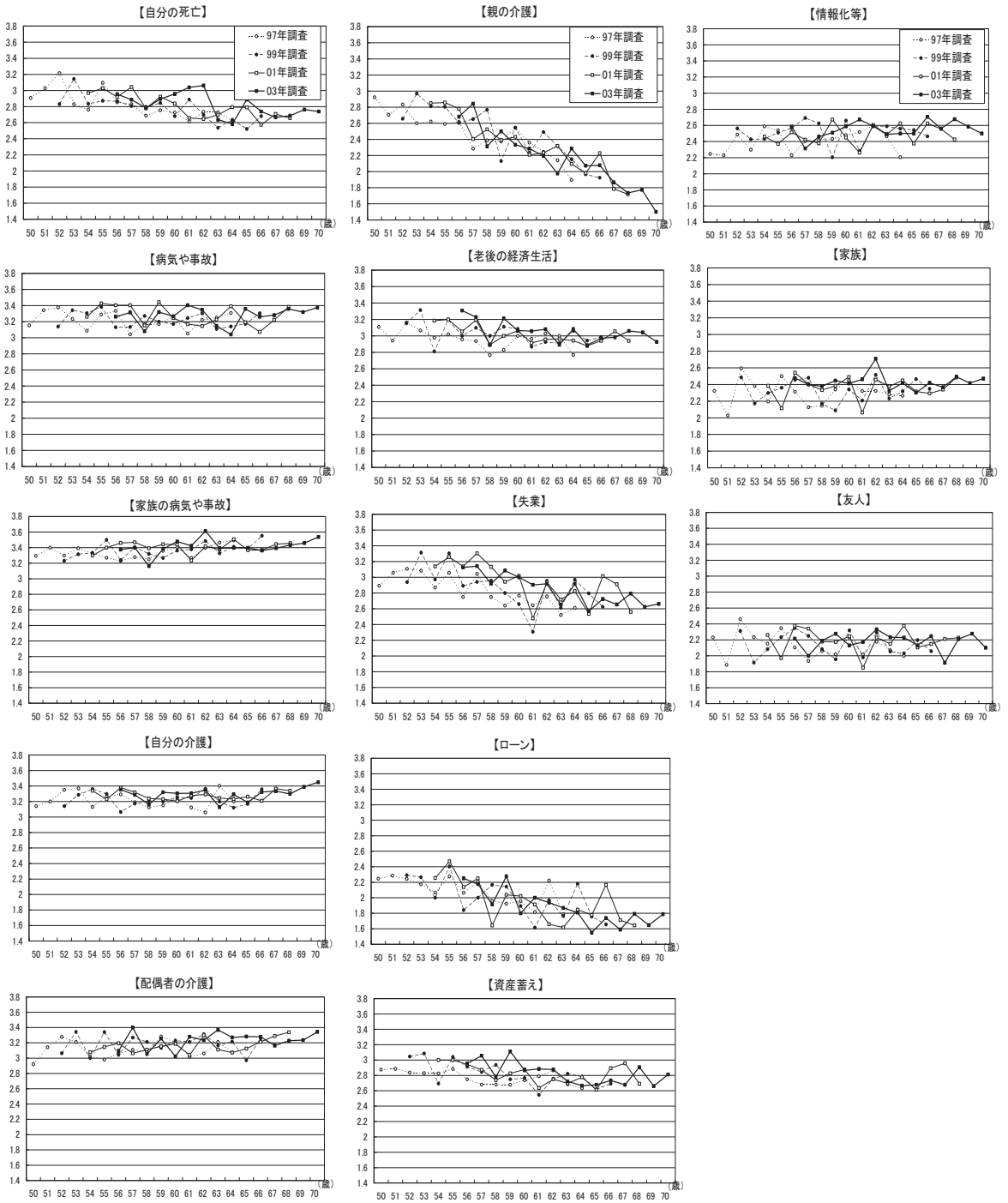
一方、時代による効果が顕著な項目はあまり見当たらないが、60歳前後では「自分の死亡」

図表-1 コーホート・調査年度別 不安の割合（13項目）

調査年度		n	自分の死亡	病気や事故	家族の病気や事故	自分の介護	親の介護	配偶者の介護	老後の経済生活
97年		814	67.7	84.5	89.4	84.0	49.5	77.9	74.8
99年		814	63.1	85.1	89.8	84.3	48.9	80.7	75.3
01年		814	66.3	88.7	92.8	85.7	43.7	80.3	76.0
03年		814	68.2	88.2	92.8	88.3	37.3	81.8	78.6
昭和8年～ 12年生まれ	97年 60-64歳	230	74.8	86.1	90.0	84.8	67.0	78.7	79.6
	99年 62-66歳	249	70.3	83.5	86.7	83.5	47.0	76.3	70.7
	01年 64-68歳	335	60.9	84.2	91.0	83.9	39.4	78.5	74.6
	03年 66-70歳	230	69.1	87.8	89.6	84.8	65.7	77.0	80.4
昭和13年～ 17年生まれ	97年 55-59歳	249	65.9	83.5	88.8	83.5	51.0	83.9	76.3
	99年 57-61歳	335	57.0	84.5	90.7	84.5	35.8	80.9	71.0
	01年 59-63歳	230	70.4	90.4	92.6	86.5	59.1	77.8	80.9
	03年 61-65歳	249	66.3	88.4	90.8	84.7	48.2	81.5	76.3
昭和18年～ 22年生まれ	97年 50-54歳	335	63.6	87.8	94.3	86.0	29.9	81.2	72.5
	99年 52-56歳	230	72.6	86.5	89.1	87.8	52.2	77.4	82.6
	01年 54-58歳	249	69.9	87.6	93.6	87.1	39.8	84.3	76.3
	03年 56-60歳	335	63.9	89.9	94.6	89.6	25.4	83.0	77.6
調査年度		n	失業	ローン	資産蓄え	情報化等	家族	友人	
97年		814	63.3	31.4	64.5	45.3	39.6	28.0	
99年		814	64.7	30.3	67.8	51.4	39.9	30.1	
01年		814	66.2	27.3	67.3	50.2	42.6	31.6	
03年		814	65.1	27.8	67.1	54.3	43.0	30.1	
昭和8年～ 12年生まれ	97年 60-64歳	230	71.7	39.1	69.1	42.6	41.3	32.2	
	99年 62-66歳	249	63.1	32.5	63.1	42.6	37.3	25.3	
	01年 64-68歳	335	57.6	25.4	62.4	49.3	40.0	27.2	
	03年 66-70歳	230	74.8	37.8	76.1	50.4	41.3	31.7	
昭和13年～ 17年生まれ	97年 55-59歳	249	57.8	30.9	66.7	48.6	35.3	28.1	
	99年 57-61歳	335	63.0	24.8	63.0	54.0	42.4	30.4	
	01年 59-63歳	230	77.8	34.8	73.5	45.7	40.4	31.7	
	03年 61-65歳	249	64.3	26.1	64.7	49.4	44.6	28.9	
昭和18年～ 22年生まれ	97年 50-54歳	335	59.7	23.0	65.1	54.0	42.7	33.4	
	99年 52-56歳	230	73.9	36.1	71.3	50.4	39.6	26.1	
	01年 54-58歳	249	63.5	25.7	65.5	52.2	44.6	32.5	
	03年 56-60歳	335	60.3	23.6	65.4	58.5	44.2	31.0	

中高年男性の不安の構造を探る

図表-2 調査年度・年齢別 不安ポイント (13項目)



や「資産蓄え」、60歳代前半では「配偶者の介護」に対する不安ポイントが、それぞれ03年調査で高くなっていることに注目できる。

Ⅲ. 不安意識等の分類

1. 不安指標の作成（主成分分析）

(1) 主成分分析の目的

不安に関する13項目をそのまま分析すると、複雑になり過ぎて不安意識の全体像を把握するのが難しくなる。そこで13項目を不安意識の内容によって構造化し、これから先の詳細分析に使用するための指標を作成することを目的として、主成分分析を行う。

(2) 分析方法

主成分分析にあたっては、データ量が多い方が傾向が安定することを重視し、97～03年までの調査4回分をプールしたパネル・データ（814サンプル×4回分、以下「プールド・データ」と呼ぶ）²の13項目に関する回答結果を数値化して³使用した。そして、13項目の相関係数を算出した上で、主成分分析を行い、さらに、バリマックス法による直交回転と斜交解のプロマックス法による2種類の因子軸回転を行った。

結果として、抽出した主成分間の相関関係や因子軸の解釈のしやすさを考慮し、本稿ではプロマックス法による回転結果を採用することとした⁴。

主成分は固有値1以上を基準として、3つの因子を抽出した。3因子の累積寄与率は58.2%である。

(3) 抽出した主成分の解釈

各主成分の因子負荷量は図表-3のとおりである。この結果をもとに、抽出された3つの因子について解釈を行う⁵。

2 各調査年度単位に不安得点の平均値を出してポンドデータを作成し、それをもとに主成分分析を行う方法が一般的だが、本稿では、純粋パネル・データの特性を生かし、814サンプル×4回分をプールしたデータをそのまま主成分分析の対象とした。

3 調査では、不安尺度を4段階スケールで質問しているが、これは結果の解釈のわかりやすさを考慮したものである。また、回答結果の分布を見る限り、尺度の連続性は担保されていると考え、本稿では、そのまま尺度として主成分分析を行った。

4 Kaiserの正規化を伴うプロマックス法により回転させている（5回の反復で回転は収束）。

5 （財）生命保険文化センター「老後生活のリスク認識に関する調査」（平成11年3月）では、35～74歳の男女を対象とした老後の生活についてのアンケート調査結果をもとに、老後リスクの因子分析を行っている。この分析結果においては、人間関係リスク（第1因子）、費用リスク（第2因子）、健康・能力低下リスク（第3因子）が検出されている。

図表-3 因子構造行列（プロマックス回転後）

	主成分		
	第1主成分	第2主成分	第3主成分
	健康不安因子	経済不安因子	人間関係不安因子
自分の死亡	0.658	0.460	0.206
病気・事故	0.838	0.377	0.275
家族の病気・事故	0.807	0.329	0.316
自分の介護	0.774	0.364	0.376
配偶者の介護	0.697	0.334	0.397
親の介護	0.240	0.512	0.131
老後の経済生活	0.611	0.720	0.459
失業	0.450	0.720	0.470
ローン	0.184	0.751	0.400
資産蓄え	0.430	0.773	0.467
情報化等	0.284	0.364	0.674
家族	0.387	0.449	0.861
友人	0.335	0.419	0.873

① 第1主成分～健康不安因子

第1主成分は「自分の死亡」、「病気・事故」、「家族の病気・事故」、「自分の介護」、「配偶者の介護」に高い正の負荷量を示す因子であり、負の負荷量を示す項目は見当たらなかった。これらに項目に共通する内容は健康不安であり、ここでは第1主成分を「健康不安因子」と解釈する。

② 第2主成分～経済不安因子

第2主成分は「親の介護」、「老後の経済生活」、「失業」、「ローン」、「資産蓄え」に高い正の負荷量を示す因子である。これらの高い負荷量を示す項目に共通するのは、家計経済に関係が深いという点であるが、注目すべきは「親の介護」がこの主成分に比較的高い負荷量を示していることである。「親の介護」が目の前に迫っている調査対象者の年代にとって、現実的な経済面の不安が特に大きいことがうかがえる。これらの内容を総合して、第2主成分を「経済不安因子」と解釈する。

③ 第3主成分～人間関係不安因子

第3主成分は「友人」、「家族」、「情報化等」に高い正の負荷量を示す因子である。「情報化等」に不安を覚えるのは、社会とのつながりに関する不安だと解釈し、第3主成分を「人間関係不安因子」と名づける。

抽出した3つの因子の固有値は、健康不安因子が5.005、経済不安因子が1.522、人間関係不安因子が1.041となっている。第1主成分の「健康不安因子」は全体の分散の38.5%と、抽出した成分の過半数を占め、最も重要な因子として位置付けられる。

(4) 不安指標

主成分分析の結果を踏まえ、数値化した13項目の回答結果を因子毎に括り直し、因子毎の平均ポイントを算出した⁶。この健康不安ポイント、経済不安ポイント、人間関係不安ポイントを、今後の分析における「不安指標」として採用することとする。

2. 不安意識を持つ人のタイプ分け（クラスタ分析）

(1) クラスタ分析の目的

各主成分間の相関係数をみると、健康不安ポイントと経済不安ポイントが0.52、健康不安ポイントと人間関係不安ポイントが0.41、経済不安因子と人間関係不安因子が0.53と、強い相関関係とまではいえないものの、3因子ともそれぞれ1%水準で有意な正の相関を示している（図表-4）。

このような、1つの不安意識が別の不安意識を高めるという構造から、同じ人が複数の不安を抱えていると推測される。

そこで、クラスタ分析により不安意識を持つ人のタイプ分けを行い、不安意識を人単位でみた場合の構造を明らかにした上で、分類されたタイプをもとに分析を進めていくこととした。

図表-4 因子間の相関

		健康不安 ポイント	経済不安 ポイント	人間関係不安 ポイント
健康不安ポイント	Pearsonの相関係数	1.00	0.52**	0.41**
	n	3,157	2,759	3,122
経済不安ポイント	Pearsonの相関係数	0.52**	1.00	0.53**
	n	2,759	2,793	2,781
人間関係不安ポイント	Pearsonの相関係数	0.41**	0.53**	1.00
	n	3,122	2,781	3,198

(注) **は相関係数が1%水準で有意（両側）。

(2) クラスタ分析の方法

調査4回分のプールド・データにより、先に作成した不安指標（健康不安ポイント、経済不安ポイント、人間関係不安ポイント）を使用してクラスタ分析を行う。調査年度毎でなく、プールド・データによってクラスタ分析を行うのは、データ量が多く、傾向が安定するためである。

6 平均値の算出にあたっては、欠損値がある項目を含むサンプルを対象から除外している。

(3) クラスタ分析の結果の解釈

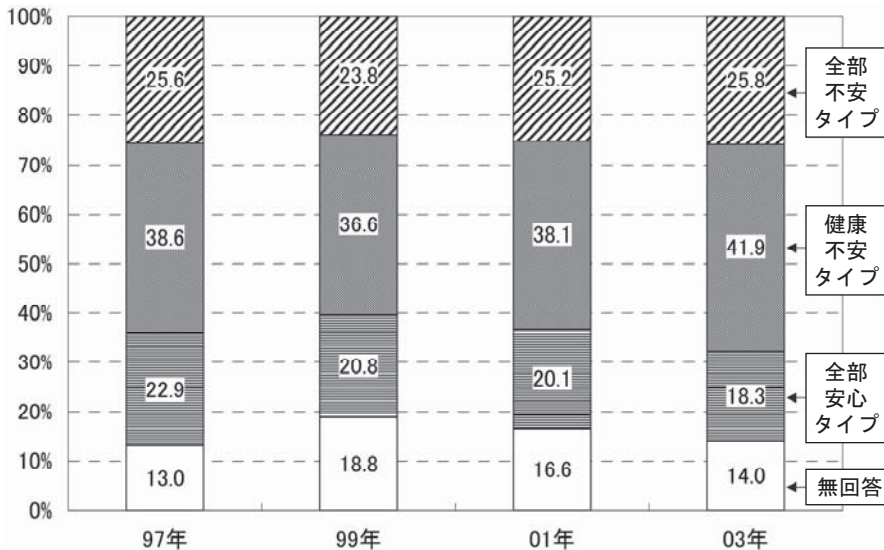
クラスタ分析の結果、健康不安ポイント、経済不安ポイント、人間関係不安ポイントのいずれも高い「全部不安タイプ」、健康不安ポイントが突出して高い「健康不安タイプ」、全体として不安ポイントが低い「全部安心タイプ」の3つのタイプに分類できた（図表-5）。

図表-5 クラスタ分析による不安タイプ別の不安指標（平均）
（ポイント）

	全部不安 タイプ	健康不安 タイプ	全部安心 タイプ
n	817	1263	668
健康不安ポイント	3.57	3.29	2.45
経済不安ポイント	3.22	2.54	1.86
人間関係不安ポイント	3.11	2.15	1.72

調査年度別にこれらの不安タイプの構成比をみると、いずれの調査年度についても健康不安タイプが最も多い。また、調査年度が新しくなるにつれて健康不安タイプが微増し、全部安心タイプが微減している。この結果、03年調査では、健康不安タイプ41.9%、全部不安タイプ25.8%、全部安心タイプ18.3%という構成になっている（図表-6）。

図表-6 不安タイプの構成比の推移



(注)「無回答」は、健康不安ポイント、経済不安ポイント、人間関係不安ポイントのいずれかが欠損値となっているサンプル。

IV. 不安意識の特徴分析

IVでは、IIIで作成した不安指標と不安タイプをもとに、どのような人が健康、経済、人間関係にどの程度の不安を抱えているのか、また、どのような人がどの不安タイプに属しているのか、について分析した。

コーホート・年齢・時代と不安意識の関係についてはIIで重点的に分析したので、ここでは、それ以外の変数に焦点をあてたい。図表-7は、健康不安、経済不安、人間関係不安の内容から、不安意識に影響すると考えられる変数を抽出・整理したものである。基本的な属性（年齢、居住地域の都市規模、最終学歴）に加え、これらの変数と不安タイプおよび不安ポイントとの関係を、プールド・データのクロス集計によって分析した。

分析結果のポイントは、図表-8に示した。全部不安タイプは、①年齢が若い、②中学・高校等卒、③健康でない、④要介護の親がいる、⑤三世帯同居、⑥収入や金融資産が少ない、⑦就業中もしくは無業だが就業希望がある、⑧自営業主や家族従業、⑨情報機器を利用していない、⑩家族や友人との関係に満足していない、といった人に多い。一方、全部安心タイプは概ね全部不安タイプと逆の傾向が読み取れ、不安意識の高低は、健康状態や経済状況といった客観的状況とある程度整合的であることが確認できた。なお、健康不安タイプは、居住地域が都市の人、高学歴の人、情報機器を利用している人に多く、情報量の多さが不安を高めている可能性もある。

図表-7 不安意識に関係すると考えられる変数の整理

不安の分類		不安意識に関係すると考えられる変数		
健康不安	自分の死亡	<div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div style="border: 1px solid black; border-radius: 10px; padding: 5px;">本人の健康状態</div> <div style="border: 1px solid black; border-radius: 10px; padding: 5px;">配偶者の状況 (有無、健康状態)</div> </div>	<div style="border: 1px dashed black; border-radius: 10px; padding: 5px;">家族の状況</div>	
	病気・事故			
	家族の病気・事故			
	自分の介護			
	配偶者の介護			
経済不安	親の介護	<div style="border: 1px dashed black; border-radius: 10px; padding: 5px;">経済的な状況</div>	<div style="border: 1px dashed black; border-radius: 10px; padding: 5px;">就業の状況</div>	<div style="border: 1px dashed black; border-radius: 10px; padding: 5px;">親の状況 (有無、要介護かどうか)</div>
	老後の経済生活			
	失業			
	ローン			
	資産蓄え			
人間関係不安	情報化・技術進歩	<div style="border: 1px solid black; border-radius: 10px; padding: 5px;">情報機器の利用状況</div>	<div style="border: 1px solid black; border-radius: 10px; padding: 5px;">友人関係の満足度</div>	<div style="border: 1px solid black; border-radius: 10px; padding: 5px;">家族との関係に関する満足度</div>
	家族対立			
	友人関係			

図表-8 不安意識の特徴のまとめ

		不安タイプ			不安指標
		全部不安	健康不安	全部安心	
基本的属性	年齢	若い	—	高齢	・若い：経済不安ポイントが高い
	居住地域の都市規模	—	都市	—	・都市：健康不安ポイントが高い ・町村：人間関係不安ポイントが高い
	最終学歴	中学・高校等卒	大学等卒	大学等卒	・中学卒：健康不安ポイントが高い ・高校等卒：経済不安ポイントが高い ・中学・高校等卒：人間関係不安ポイントが高い
健康状態や家族の状況	自分や配偶者の健康状態	不健康	—	健康	・健康でない：健康・経済・人間関係不安ポイントが高い
	親の状況	親がいる(要介護)	—	親がいない	・親がいる(要介護)：経済不安ポイントが高い
	家族構成	三世同居	—	—	・三世同居：健康・経済・人間関係不安ポイントが高い ・一人暮らし・夫婦のみ：経済不安ポイントが低い
経済的な状況	収入	低い	—	高い	—
	金融資産残高	低い	—	高い	—
就業の状況	仕事の有無	就業・無業(就業希望あり)	—	無業(就業希望なし)	・就業：経済・人間関係不安ポイントが高い ・無業(就業希望あり)：健康・経済・人間関係不安ポイントが高い
	仕事の内容	自営業主・家族従業員	非正規従業員	役員・正規従業員	・自営業主・家族従業員：経済・人間関係不安ポイントが高い
情報機器の利用状況		利用していない	利用している	利用している	(パソコン・インターネット・e-mailについて) ・利用していない：経済・人間関係不安ポイントが高い
家族や友人関係の満足度		不満	—	満足	—

V. 不安意識の変化に関する分析

IVはプールド・データのクロス集計による分析であり、たとえば、親が要介護状態にある人の不安意識が強いからといって、親の介護によって不安意識が強くなったのかどうかまでは検証できない。しかし、パネル調査は同じサンプルを追いつけていることから、親が要介護に変化した前後の不安意識の変化をみることができる。

Vでは、パネル・データの特徴を生かし、不安意識に影響を及ぼすと考えられる状況変化が起こった前後で、不安意識がどのように変化していくかについて分析することとしたい。

状況変化については、一定程度の該当サンプルを確保できるかどうかを考慮しつつ、図表-9のとおり、いくつかの類型を抽出し、97年から03年にかけての変化の有無によって「変化あり」と「変化なし」に分類した。なお、「変化あり」の比較対象として作成した「変化なし」は、97年の段階で変化前の状況にあり、03年にも同じ状況を維持し続けている(一度も変化していない)カテゴリーである(たとえば、「本人/不健康へ変化」の場合は、97~03年の調査について「健康」と回答したサンプルが該当)。

以下、状況変化に伴う不安意識の変化について、状況変化と同じ区間の不安指標の変動によ

図表-9 状況変化の類型化の考え方

状況変化の類型		考え方
健康状態や 家族の状況	本人／不健康へ変化	「健康（健康・どちらかといえば健康）」から 「不健康（あまり健康でない・健康でない）」へ変化
	配偶者／不健康へ変化	「健康（健康・どちらかといえば健康）」から 「不健康（あまり健康でない・健康でない）」へ変化
	親／要介護へ変化	「親がいる（要介護でない）」から 「親がいる（要介護）」へ変化
	親／死別	「親がいる（要介護でない）」or「親がいる（要介護）」 から「親がいない」へ変化
経済的な状況	年収の減少	本人年収650万円以上が650万円未満になったケースを 「年収の減少」と捉える
	金融資産の増加 (金融資産について、97年は質問形式が異なるので、99年からの変化をみる)	本人金融資産残高400万円未満が400万円以上になった ケースを「金融資産の増加」と捉える
	金融資産の減少	本人金融資産残高400万円以上が400万円未満になった ケースを「金融資産の減少」と捉える
就業の状況	仕事／無業へ変化	「仕事をしている」から「していない」へ変化
情報機器の 利用状況	パソコン／利用へ変化 (99年は調査していない)	「利用していない」から「利用している」へ変化

って分析していく。

分析結果のポイントを図表-10に示した。「本人／不健康へ変化」では、「変化あり」の健康・経済不安ポイントが、「変化なし」の場合に比べて大きく上昇しており、人間関係不安もやや高まっている。「親／死別」では「変化あり」の経済不安ポイントが低下しており、「親の介護」が経済不安因子に分類されたことと符合する結果となっている。

「年収の減少」、「金融資産の減少」によって経済不安ポイントが低下しているという結果の解釈にあたっては、経済不安ポイントが、状況変化の有無にかかわらず全体として低下していることにも留意する必要がある。また、「年収の減少」については、「変化あり」の経済不安ポイントの低下幅が「変化なし」に比べて小さい。なお、金融資産の増加については、状況変化の有無によって不安意識に大きな変化がみられていない。

IVの分析では、全部安心タイプの金融資産残高が最も高く、次に高いのが健康不安タイプ、全部不安タイプという順番になっていたが、金融資産残高の増加に伴う不安指標の変動をみると、IVの分析と整合的な結果にはなっていない。すなわち、金融資産を多く持っている人の方が経済不安意識は小さいが、この調査の対象者の年代に至ってからの金融資産の増加が不安意識に与える影響は、必ずしも明確ではない。

「仕事／無業へ変化」でも、「変化あり」は経済不安ポイントが低下している。これは、無業の人は不安意識が小さいというIVの分析結果と同様の傾向だといえる。

この他、配偶者の健康状態、親が要介護かどうか、パソコンの利用状況に関しては、IVの分析では不安タイプや不安指標に特徴がみられたものの、03年までの変化をみる限りでは、不安意識に顕著な差が確認できなかった。

中高年男性の不安の構造を探る

図表-10 状況変化と不安指標の変動

(ポイント)

状況変化の類型		変化の有無	不安指標の変動		
			健康不安	経済不安	人間関係不安
全体計 (814)			0.07	-0.07	0.10
健康状態や 家族の状況	本人／不健康へ変化	変化あり (55)	0.36	0.15	0.14
		変化なし (499)	0.06	-0.06	0.10
		差	0.31	0.21	0.05
	配偶者／不健康へ変化	変化あり (46)	0.12	-0.04	0.00
		変化なし (564)	0.09	-0.06	0.10
		差	0.03	0.02	-0.10
	親／要介護へ変化	変化あり (30)	0.08	0.01	0.12
		変化なし (305)	0.03	-0.05	0.02
		差	0.05	0.06	0.10
	親／死別	変化あり (187)	0.10	-0.29	0.17
		変化なし (380)	0.05	-0.03	0.04
		差	0.05	-0.26	0.13
経済的な状況	年取の減少	変化あり (62)	-0.09	-0.07	0.05
		変化なし (34)	0.00	-0.28	-0.05
		差	-0.09	0.21	0.10
	金融資産が増加	変化あり (40)	0.14	-0.01	0.09
		変化なし (70)	0.16	0.04	0.10
		差	-0.03	-0.05	-0.01
	金融資産の減少	変化あり (43)	-0.09	-0.22	-0.14
		変化なし (205)	0.07	-0.14	0.08
		差	-0.15	-0.09	-0.22
就業の状況	仕事／無業へ変化	変化あり (140)	0.12	-0.20	0.04
		変化なし (452)	0.04	-0.03	0.13
		差	0.08	-0.17	-0.10
情報機器利用状況	パソコン／利用へ変化	変化あり (155)	0.11	-0.03	0.03
		変化なし (436)	0.09	-0.06	0.15
		差	0.02	0.03	-0.12

(注1) 表側の () 内の数値は調査数 (n)。

(注2) 不安指標の変動=03年調査の不安ポイント-97年の不安ポイント

(注3) 差 = 「変化あり」の不安指標の変動 (ポイント) - 「変化なし」の不安指標の変動 (ポイント)

(注4) 金融資産については、97年調査の質問形式が他と異なるため、99年～03年の変化をみている。

VI. まとめ

中高年男性の不安の構造を明らかにすることを目的として、ここまでの分析を行ってきた。中高年男性の不安の全貌を解明するまでには至らなかったが、パネル・データを使った分析により、不安意識の解明に一步近づくことができたのではないかと考える。

最後に、ここまでの分析結果のポイントをまとめるとともに、結果に関する若干の考察を行いたい。

(1) 中高年男性の不安において重要な位置を占める健康不安

不安13項目についてのトレンドをみたところ、年齢が高くなるほど「親の介護」、「失業」、「ローン」への不安意識が弱まる一方で、「病気や事故」、「家族の病気や事故」、「自分の介護」、「配

偶者の介護」は、60歳代後半ぐらいから不安意識がやや強くなっていた。

不安13項目の結果をもとに、主成分分析によって不安の内容を構造化したところ、健康不安因子（自分の死亡、病気や事故、家族の病気や事故、自分の介護、配偶者の介護）、経済不安因子（親の介護、老後の経済生活、失業、ローン、資産蓄え）、人間関係不安因子（情報化等、家族、友人）といった3つの因子が検出された。年齢が高くなるほど不安意識が低下していた「親の介護」、「失業」、「ローン」は経済不安因子に分類され、60歳代後半ぐらいから不安意識がやや高くなっていた「病気や事故」、「家族の病気や事故」、「自分の介護」、「配偶者の介護」は健康不安に分類された。

主成分分析の結果、健康不安因子は全体の分散の38.5%と、抽出した成分の過半数を占め、最も重要な因子として位置付けられた。また、それぞれの因子の間に有意な正の相関が認められ、1つの不安意識が別の不安意識を高めるという構造が明らかになった。

次に、不安意識の持ち方に視点をあてて、人単位でクラスタ分析によるタイプ分けを行ったところ、健康・経済・人間関係のいずれについても不安が強い「全部不安タイプ」（03年調査では25.8%）、健康不安が突出して強い「健康不安タイプ」（同41.9%）、全体として不安が少ない「全部安心タイプ」（同18.3%）の3つのタイプに分類された。クラスタ分析においても、健康不安タイプは全体の4割以上を占め、多くの中老年男性が健康不安タイプに分類される結果となった。このように、主成分分析による不安意識の内容の分類、クラスタ分析による人単位の不安意識のタイプ分けによる分析の結果から、中老年男性の不安において、健康不安が重要な位置を占めていることが確認できた。

(2) 不安意識の高低は調査対象者の現状とある程度整合的

全部不安タイプは、①年齢が若い、②中学・高校等卒、③健康でない、④要介護の親がいる、⑤三世同居、⑥収入や金融資産が少ない、⑦就業中もしくは無業だが就業希望がある、⑧自営業主や家族従業、⑨情報機器を利用していない、⑩家族や友人との関係に満足していない、といった人に多い。一方、全部安心タイプは概ね全部不安タイプと逆の傾向が読み取れる。

このように、不安意識は健康状態や経済状況が万全でない場合に高くなっており、不安意識は単に漠然としたものばかりではなく、その高低は調査対象者の客観的状況とある程度整合的だと捉えられる。

ただし、健康不安タイプは、居住地域が都市の人、高学歴の人、情報機器を利用している人に多く、情報量の多さが不安につながっている可能性があることも否定できない。

(3) 経済的基盤の強化は前倒しで

プールド・データでは、金融資産が多い人は不安が小さいという特徴がみられたが、2003年までの変化をみる限り、金融資産の増加が不安意識に与える影響は、必ずしも明確ではない。

中高年男性の不安の構造を探る

この結果から、不安意識を軽減するためには、若い頃から経済的基盤の強化をスタートする方が望ましいことが読みとれる。

参考文献

- (財)生命保険文化センター (1999) 「老後生活のリスク認識に関する調査」。
- 岸田宏司 (2004) 「定年によるソーシャル・キャピタルの変化」『ニッセイ基礎研所報』VOL. 30、pp5-pp25、ニッセイ基礎研究所。
- 武石恵美子・松浦民恵 (2001) 「中高年ライフコース研究 (その1) —中高年パネル調査を通じて (就業分析) —」『ニッセイ基礎研レポート』2001年7月号 pp2-pp7、ニッセイ基礎研究所。
- 松浦民恵 (2005) 「中高年男性の不安—家族構成を軸としたパネルデータ分析—」『関西大学研究双書 世代間の自立・協力・公正』pp91-pp128、関西大学。
- 松浦民恵 (2005) 「中高年男性の不安の構造を探る—キーワードは健康不安—」『ニッセイ基礎研所報』VOL. 39、pp84-pp118、ニッセイ基礎研究所。

